法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-01

ベルファストの現在

北，文美子

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
41
(終了ページ / End Page)
44
(発行年 / Year)
2011-04-01

Hosei University Repository

essay

ベルファストの現在

北　文美子

ベルファストは北アイルランドの中心都市で、アイルランド島北東の海岸に位置する。1972年1月英国軍の発砲により市民14名が犠牲となった「血の日曜日事件」が起こった第二の都市デリーと並び、30年以上にわたる北アイルランド紛争の舞台となった。市の中心には、紛争を取材したジャーナリストたちが滞在したことで有名なヨーロッパ・ホテルがあり、その歴史を裏づけるかのように、ガイドブックには「西ヨーロッパで最も頻繁に爆破されたホテル」と紹介されている。武力組織によって繰り返される爆弾テロ、雨が多く晴れ渡ることのない空模様、帰属をめぐって対立する住民。ベルファストのイメージはあくまでも暗い。

しかしながら、このような一般に想像されるベルファストと現実のベルファストには、今では大きな隔たりがあるといっていい。緩やかではあるものの着実に前進した和平プロセスの結果、2005年にはカトリック系の最大武力組織である暫定派IRAが武器の放棄を宣言し、2007年には英国軍が北アイルランド紛争の終結を象徴するべく本土に撤退した。北アイルランド社会は確実に変容しており、首都のベルファストでも、十数年前まではショッピングセンターに入るのでさえ

Hosei University Repository

空港並みの荷物検査が行われ、また街頭には銃を持って警備する兵士や防弾チョッキを身に着けた警察官が見られたのであるが、現在では他の都市と変わらない日常風景がうかがえる。街の中心には、ネクストやブーツといったどこにでもあるようなチェーン展開の大型店舗が軒を連ね、通りにはスターバックスなどさまざまなカフェが点在する。現在のベルファスト市内中心に限っていえば、北アイルランド紛争の傷跡はほとんど見当たらないといっても、過言ではない。

現在の市民生活は、治安の安定とともに、文化を享受する余裕がうかがえるようになった。もともとさかんであった詩の朗読会に加えて、オペラ、演劇、コンサートなど、国内はもとより海外のオーケストラやアーティストを招聘し、さまざまな文化イベントが催されている。毎年秋に行われるベルファスト・フェスティバルはその最たるものであって、文学、演劇、音楽、映画、絵画など大小交えて数百にものぼる企画が用意されている。もちろん、そのような特別な機会でなくとも、たとえば、クィーンズ大学に付属している映画館では海外の話題作から日本のオタク向きのアニメまで幅広いジャンルの映画を鑑賞することもできるし、また、映画鑑賞のあとには、クィーンズ大学に隣接するファッショナブルなレストラン、たとえば、ディーンズなどで、量を重んじていたかつての外食産業では考えられなかった、質を重視し素材の味を生かした創作料理を堪能することもできる。また、もう少し経済的に余裕のある層では、市内のオペラ・ハウス、アルスター・ホール、あるいはウォーターフロント・ホールでオペラや演劇、クラッシックのコンサートを楽しみ、シャフツベリー・スクウェアにあるベルファストの老舗レストラン、カイエンヌで、BBC の料理番組にも登場するオーナー・シェフ、ポール・ランキンの北アイルランドの食材にこだわった伝統的な「フレンチ」を心ゆくまで楽しむことも、もはやそれほど特別なことではなくなっている。

Hosei University Repository

一方、観光客についていえば、今でもベルファストを訪れる人の大半は、実際の街の風景を目の当たりにするまで、前述したような紛争に疲弊した物騒な都市であるというイメージが強い。現在のベルファスト市では、このような人々のイメージをむしろ逆手にとって、紛争の歴史を積極的に観光事業に活かそうと試みている。ベルファストの市庁舎そばのツーリスト・インフォメーションでは、ベルファストの観光の目玉として観光客を対象とした紛争バス・ツアーが紹介されている。建物の斜め向かいから出発するこのバス・ツアーは、１時間半ほどかけてベルファスト市内、郊外の一部をめぐり、同乗するガイドが北アイルランド紛争の歴史を解説する。ガイドは概して強いベルファスト訛りがあるため、ベルファストの英語に慣れていないものにとっては、たとえ英語のネィティブ・スピーカーであったとしてもすべてを理解することは決して容易なことではない。とはいえ、ガイドの訛りから現地の雰囲気を満喫することができ、異国情緒を掻き立てられることは間違いない。

バスは、自治政府のあるストーモント議会、ベルファストの誇りともいえるタイタニック号を生み出したハーランド・アンド・ウルフ造船所を抜け、西ベルファスト地区に向かう。西ベルファストは、70年代以降、カトリック系住民とプロテスタント系住民との間で激しい対立が見られた地区である。現在でも治安維持のために築かれたコミュニティを分断するピース・ラインと呼ばれる大きな壁が聳え立っており、家の壁には複雑な帰属意識を反映したミューラルと呼ばれる壁絵が見られる。分断の歴史がそこでは日常的な風景に深く刻み込まれているのであるが、たとえば、プロテスタントのミューラルでは、カトリックを破った戦勝記念としてウィリアム・オレンジ公の絵が描かれ、一方、カトリック側では、プロテスタントに蹂躙された歴史から解放を試みた英雄たちの肖像が描かれている。北アイルランド社会の

Hosei University Repository

分断を象徴するこれらの文化表象は、かつてこの地区に足を踏み入れることがきわめて困難であったことから、現在では観光客ばかりでなく、好奇心旺盛な現地の人にとっても大きな魅力となっているのである。

しかしながら、バス・ツアーの最大の魅力ともいえるこれらミューラルを含めた北アイルランドのアイデンティティにかかわる文化表象は、それらを保存することによりコミュニティの排他意識を強めてしまうのではないかという懸念が一方である。実際に、和平プロセスが一段落したとはいえ、「住み分け」というかたちで、30年以上相互の干渉を回避してきたプロテスタント地区とカトリック地区との完全な融和には、まだまだ時間がかかることは容易に想像される。かつて多くの政治犯を収容したことで知られる北アイルランド紛争の象徴ともいえるメイズ刑務所の扱いをめぐって、ふたつのコミュニティが真っ向からぶつかりあっていることからも、その難しさを理解することができる。メイズ刑務所を北アイルランド紛争の記憶を残すための博物館とするべきであるというカトリック側の提案とは裏腹に、プロテスタント側では刑務所を撤去し大型の公共施設を建設するべきであると主張しているのである。

武力衝突こそなくなったものの、平和への道はまだまだ遠く長いものかもしれない。紛争を乗り越え、変容しつつあるベルファストの行方は、歴史の受容、文化の普及など、さまざまな問題を考えていく上でも興味深い。今後の動向にさらに注目したいと思っている。